

17点のプリーストリ

杉山忠平

わたしはまえに一橋大学図書館報の『鐘』(No.8)にウィリアム・ハトンの遺著のことを書いたが、そのさい一言ジョウゼフ・プリーストリの名にふれるところがあった。そこで、ここでは一橋大学社会科学古典資料センター所蔵のプリーストリの著書のみをみることにしよう。

おどろくべきほど多産な著作活動をしたプリーストリの著書のうち、直接日本で利用できるものが何点あるのかはわからないが、古典資料センターはそのうち17点を所蔵している。ただし、同一の文献(別版)が重複して所蔵されている場合が1件あるが、それはとりあえず計2点とせず、1点と数えてある。また匿名書でプリーストリのものであることがあきらかな1点も含めてある。逆に匿名文献で内容上あきらかにプリーストリに帰しえないものがカタログに誤ってプリーストリのものとして記載されている例が1件あるが、これは、当然ながら、ここでは除外されている。

この数字は、プリーストリがそこで生まれ、生涯の大半をすごしたイギリスと、最後の10年間をすごしたアメリカとの諸図書館を別とすれば、この古典資料センターがおそらくプリーストリのものをもっとも多く所蔵する部類にはいるであろうことを示しているといつてさしつかえあるまい。いまそれらの文献を刊行年順に列記してみるなら、次のとおりである。

- (1) *An essay on the first principles of government*, London, 1768. [M]
- (2) *An appeal to the serious and candid professors of Christianity*, 4th ed., London, 1772. [F]
- (3) *A history of the corruptions of Christianity*, Birmingham, 1782. [R]
- (4) *Institutes of natural and revealed religion*, 2nd ed., Birmingham, 1782. [R]
- (5) *A reply to the animadversions on the History of the Corruptions of Christianity*, Birmingham, 1783. [R]
- (6) *Letters to Dr. Horsley in answer to his animadversions on the History of the Corruptions of Christianity*, Birmingham, 1783. [R]
- (7) *Letters to Dr. Horsley, etc.*, Pt. II, Birmingham, 1784. [R]
- (8) *Remarks on the Monthly Review of the Letters to Dr. Horsley*, Birmingham, 1784. [R]
- (9) Anon. (Priestley), *An appeal to the public, on the riots in Birmingham*, Birmingham, 1791. [R]
- (10) *The evidence of the resurrection of Jesus considered*, Birmingham, 1791. [F]
- (11) *Letters to the members of the New Jerusalem Church*, Birmingham, 1791. [R]
- (12) *Letters to a philosophical unbeliever*, 2nd ed., Birmingham, 1791. [F]
- (13) *Letters to the Right Hon. Edmund Burke*, Birmingham, 1791. [R]
- (13A) *Ibid.*, 3rd ed., Birmingham, 1791. [F]
- (14) *A discourse on occasion of the death of Dr. Price*, London, 1791. [R]
- (15) *Letters to the philosophers and politicians of France on the subject of religion*, London, 1793. [F]
- (16) *Lectures on history, and general policy*, new ed., London, 1826. [R]

(17) *Memoirs of the Rev. Dr. Joseph Priestley*, 4th ed., London, 1833. [R]

それぞれの書名の末尾に書かれたカッコ内の文字はFがバート・フランクリン文庫、Mがカール・メンガー文庫、Rが一般貴重書をあらわしている。全17点のうち、メンガー文庫に属するものは1、フランクリン文庫に属するものは4、一般貴重書に属するものは12である。

してみると、経済学者メンガーのプリーストリへの関心はジェレミー・ベンタムを先駆したとベンタム自身によっても認められた古典的な政治論的著作(1)以上にはおよばなかったこと、メンガーにせよフランクリンにせよ、個人による収集よりは、不特定の集書の偶然的な蓄積になるものが大半を占めること、などの興味ある事実が判明する。

これらの蔵書を一覽してわかることは、一部を除いて、大半が宗教関係の著作だということである。いま「一部を除いて」といったが、「一部」とはフランス革命の当否をめぐるエドモンド・バーク論難書である(13)や、ウォリントン・アカデミーでのプリーストリの教科プランである(16)や、彼がその受難者だったバーミンガム事件とそれにたいする当局や国教会聖職者の態度の非とを論じた(9)や、メンガー文庫所蔵の(1)や、回想の手記(17)である。(14)の“discourse”はこの場合“sermon”と同義であって、この本はそれ自体宗教書とみられるべきであり、「一部」にははならない。(プリーストリのものだけでなく、“discourse”と名づけられた説教書はけっしてすくなくない)それにしても、一橋大学のような大学が、なぜ歴代の集書過程で、このように宗教関係の著作を所蔵するに至ったのであろうか。

もっとも、いま「一部」として一応除外した数点も、広義にとれば、宗教的著作といえなくもない。(16)についていえば、ウォリントン・アカデミーは、もともと非国教徒の子弟のための教育機関であったし、そこでのプリーストリの意図する教科内容も、彼の宗教観を反映しているといえる。(9)についていえば、バーミンガム事件は非国教派の中心にいたプリーストリにたいする国教派の攻撃に端を発していたのであり、同書の内容もそうした事件の性格を当然に表現している。(17)についていうなら、宗教者プリーストリの回想記がどのような内容のものとならざるをえなかったかは、あらためていうまでもないであろう。

一見もっとも非宗教的なカテゴリーに属しそうな(1)と(13)についても、同様のことがいえる。(1)におけるプリーストリのもっとも主要な関心事は、宗教的自由にあった。「人類を漸進的な——もっとも緩慢ではあるがもっとも確実な——方法で幸福へと導くのが神の摂理の一貫した意図であるように思われる。悪はつねに善に、不完全はつねに完全に至る」(*An Essay*, p. 139)。だから政治制度の是非は宗教的自由を保障するか否かにかかっている。何であれ、自由のないところに進歩はないからである。「宗教は知識の他の諸部門と同じ基礎にはおかれえない。キリスト教のすべては新約聖書に含まれ、そこに述べられているのだから、キリスト教についてすでにわかっていること以上を期待すべき理由はないし、したがってまた知識を現状において固定することは正しいのだ。もしそう考える人がいるなら、わたしはその人たちの弱さと偏見とを心から憐むとだけいたい。このような意見は、キリスト教世界にこれまでおこったことについての全面的な無知か、あるいは誤りやすい人間の権威的制度への狂信的な愛着かに由来するにすぎないからである」(*Ib.*, p. 153)。

こうプリーストリはいつている。キリスト教にかんする「知識を現状において固定」し、「誤りやすい人間の権威的制度」を固執すること、いかえれば信仰への国家の政治的介入、宗教の国定が進歩に反するというのである。プリーストリも自由と進歩の徒であった。

(13)におけるフランス革命にたいする賛否のかぎも、一つには、宗教的自由にかかっていた。「政府はこれまで一般に多数者にたいする少数者の結合にほとんどことならなかった。そしてこれら少数者の卑俗な情欲と低劣な狡知にたいして人類の多大な利益は犠牲に供されてきた」

(*Letters*, p. 141)。 宗教についても無限の誤りがつづいた。宗教は神と人間の良心とのみにかかわり、「市民政府自体はそれと何の関係もない」のに、これまで宗教を国定し、「偶像を設け、もっとも苛酷な刑罰をもって万人をこれに強制的に服させてきた」のである(*Ib.*, p. 144)。

こうしてプリーストリはフランス革命が稱揚されるべき理由の一つに信仰の自由の保障をあげたのであった。「市民政府」のこれまでの誤りとして、彼は戦争や植民地支配をもあげ、それらをも人間の無知と不遜に帰しているのだが(*Ib.*, pp. 146-7)、宗教にたいする政府の介入も同列に数えているのである。

こうみえてくると、一見非宗教的な主題のものもまた、上に書いたように、広くは宗教的著作にはいるのであり、それはまたプリーストリの全生涯からいって当然でもあった。その意味ではプリーストリにかんする「不特定の集書の偶然的な蓄積」がいまあるようなものとなったのも、あながち偶然とはいえないことになるかもしれない。

プリーストリの思想の諸局面やその歴史的な意義や位置を知るには、所蔵17点ではあきらかに不足であるが、しかしその一端はともかくもうかがえそうである。彼の歴史観にしても、それを端的に示す著作はそこに含まれていないが、たとえば(16)はたしかにおなじ基礎に根ざしている。彼はいたずらに国王や将軍や政治家たちの事蹟にのみページをさき、人民や科学や産業や商業の進歩に目をそそごうとしない在来の歴史記述を排することによって、彼のしかたで啓蒙の調べを奏でたのである。

啓蒙主義者はしばしば人間の知的進歩がやがては人間を完全性に導くだろうと信じた。プリーストリもまた「不完全は完全に至る」と確信した。ただ、そのような無限進歩の原動力を彼はつねに「神の摂理」にあると信じて疑わなかった。それもまた、あるいはそれこそが、かれのしかたであった。

(一橋大学社会科学古典資料センター教授)